

まえがき

本書は平成15年度（2003年）からの2カ年にわたり、それぞれ「アフリカにおける『人間の安全保障』の射程」、そして「アフリカ紛争問題への人間中心アプローチ」という調査研究課題を掲げて実施した研究会の最終成果である。すでに中間成果として、初年度のテーマをタイトルとする調査研究報告書を発表した。本書ではそこに提示された問題意識に立脚しつつも、さらなる論点を追求し、具体的事例に即して分析することを試みた。

人間の安全保障という、すぐれて今日的な課題を調査研究の中心に据えるにあたって、われわれがこの概念に対する関心の高まりを強く意識していたことは事実である。とはいえ、これをアフリカ地域で生起する問題に適用することについては、近年のアフリカ問題への関心の高まりに加えて、アジア経済研究所における調査研究の潮流が大いにかかわっている。すでに平成9年度より、われわれのメンバーの一人である武内進一氏を中心にアフリカの紛争に焦点を当てた研究会が組織された。その成果（武内進一編『現代アフリカの紛争—歴史と主体—』）を踏まえて、さらに平成13年度よりアフリカ以外の地域にも関心対象を拡げた調査研究が展開され、次なる成果（武内進一編『国家・暴力・政治—アジア・アフリカの紛争をめぐって—』）がものされている。この紛争研究の流れこそ、本書を編むにいたる底流のひとつであった。

他方、やはりメンバーの一人である篠田英朗氏を中心に、2002年から広島大学平和科学研究センター（IPSHU）が実施した共同研究プロジェクトがあり、編者がこれに参加する機会を得たことも本調査研究を立ち上げる大きな契機であった。人間の安全保障と平和構築を結びつけるという課題設定、さらに日本人とは発想の異なるアメリカ人研究者をも加えた調査研究から、人間の安全保障とその隣接概念とのインターフェイスについて大いなる示唆を

得たからである。その成果（IPSHU English Research Paper Series No.19および篠田英朗・上杉勇司編『紛争と人間の安全保障—新しい平和構築のアプローチを求めて—』）にみる論点の拡がりには、その証左にほかならない。

われわれの研究会では、人間の安全保障がきわめて間口の広い概念であることに加えて、上述のとおり隣接概念との関連性を整理することも必要と考え、まずは国連人間の安全保障委員会による報告書（*Human Security Now*）を踏まえつつ作業を開始した。それゆえ、人間の安全保障はいかにあるべきか、といった理念の追求は行っていない。むしろ、この人間の安全保障概念をとくにアフリカという地域で生じている諸問題に適用するとき、そこにどのような可能性と限界があるのかを考察したのが本書である。

すでに人間の安全保障に関心の中核に据えた研究成果が少なからず発表されてきており、それらはわれわれの調査研究活動にとっても重要な糧となった。なかでも明治学院大学の勝俣誠氏、そして徳島大学の饗場和彦氏には、研究会の講師として研究所においでいただき、直接にお話を伺う機会を得ることができた。研究会発足当初より手弁当で参加していただいた日本学術振興会特別研究員の井上実佳氏とともに、ここに記して感謝の意を表したい。さらに研究所の同僚である平野克己、津田みわ、高根務、佐藤章、児玉由佳、牧野久美子、吉田栄一、福西隆弘、窪田朋子、青木まき、原島梓の各氏には、オブザーバーとして研究会での議論に参加していただき、その深化のうえで大いなる助力を得たことについても、あわせて記しておきたい。

いまや人間の安全保障をめぐる動きは、その可能性を追求する局面を経て、援助の現場における具体的な適用の段階に入っている。また研究者のあいだには、この概念をいち早く標榜したカナダにおいてのみならず、日本でもコンソーシアムという形で専門分野を超えた横の連帯が形成され、問題追求の気運が醸成されつつある。編者としては、本書がこうした流れのなかに位置づけられ、そこでの議論に一石を投じることを期待するものである。